
研究論文

現象の多面的理解を支援する「コンテクスト間の移動」
に関する一試論

ーグローバル市民性の醸成に向けてー

An Exploratory Study of “Context Shifting” for Understanding
Multifaceted Aspects of Phenomena:

Toward the Cultivation of Global Citizenship

石黒 武人^{1)*}

Taketo ISHIGURO^{1)*}

Abstract

This theoretical paper explicates a form of “multifaceted understanding of phenomena” that is required in this globalized society and the concept of context shifting (CS) as a cognitive tool for attaining a multifaceted understanding of phenomena. Context shifting is an intentional cognitive frame shifting and a subsequent empathic praxis, with an emphasis upon the role of context. The present paper explains CS in detail, and includes a diagram showing how CS can be used to shift to different levels of contexts: macro-contexts, mezzo-contexts, and micro-contexts. Specific examples are intertwined in the explanations of CS to illustrate the ways in which using CS results in a multifaceted understanding of phenomena. Multiple and systematic shifts to varied contexts, triggered by CS, can lead people to see multiple and dynamic aspects of oneself, others, and phenomena. As a result, people can avoid stereotypical, static, and often negative interpretations of phenomena based on limited exposure to other cultures and unfamiliar phenomena. With regard to ongoing globalization, this paper examines how CS can contribute to the cultivation of global citizenship through the development of a multi-faceted understanding of phenomena.

Key words

多面的現象理解、コンテクスト間の移動、意図性、グローバル市民性
A multiple understanding of phenomena, Context shifting, Intentionality, Global citizenship

¹⁾ 順天堂大学 国際教養学部 (Email : t-ishiguro@juntendo.ac.jp)

* 責任著者 : 石黒 武人

[October 9, 2015 原稿受付] [December 7, 2015 掲載決定]

1. 本論考の背景および目的

現代社会において要請されている国際(的)な教養の一要素として、個人の目の前に立ち現れる現象に関する多面的な理解がある。多様な人びとによって構成されるグローバル化した社会においては、「人と人を結びつける社会関係資本」(稲葉, 2011, p. iii)を構築するために、社会の構成員のさまざまな立場・観点から捉えられた現象の意味、そして、それらの間に生まれる複層的な関係性を理解する意識と能力が必要とされている。

しかしながら、現実には、多くの人びとが、現象を理解する際、ほぼ無意識のうちに、特定の限られたコンテキスト(物理的環境、社会・文化的な規則、規範、当事者間の共有知識や対人関係など)のなかで現象を単純化、矮小化して解釈してしまうことがある。場合によっては、否定的な解釈が前景化され、その結果、不信感、摩擦、対立、そして紛争につながっている。

もちろん、現象を単純化して捉える人びとがいる一方で、眼前に立ち上がる「他者」を含む現象を多様な観点から捉え、現象の多面的な理解を実践し、摩擦や対立を解消するために努力を続ける人びともいる。したがって、本稿は、人間全般について、常に現象を単純化、矮小化して捉える、という前提に立つものではなく、多様で異質な他者、不慣れな現象を目の前にした人びとが、無意識的に単純化した認知プロセスに陥ってしまうケースを想定している。本稿では、その認知プロセスから脱却し、達成される「現象の多面的理解」のあり様について論じ、さらに、そうした理解の実現にとって有効な一助になりうる「コンテキスト間の移動」という考え方を提示するものである。

多様な他者との関わりを端緒とする、現象の単純化と否定的解釈の前景化は日常的に観察される。たとえば、ある日本人が、たまたま電車で遭遇したアジア系の外国人観光客を見ながら、東京・秋葉原で大量の買い物をし、禁止区域で路上喫煙をするテレビで報じられる外国人

観光客の様子を直ちに想起し、買い物が日本にもたらす経済的側面や、「マナー違反」といった道徳・文化の側面という2つの限定的なコンテキスト(共有知識)で、他者(外国人観光客)を理解し、どちらかといえば後者の否定的なイメージを喚起する存在として観光客を認識することがある。

こうした大手メディアによって供給される、理解のコンテキストと随伴する否定的なイメージは、その影響を受けた人びとの認識世界のなかではほぼ自動的に前景化され、実は潜在的には無数にあるはずのコンテキストは背景に埋もれ、本来多様な側面をもつ他者(観光客)のアイデンティティや現象(他者の行為)の意味が、矮小化された形で否定的に理解される。この否定的なイメージが認識者にとっては、「リアル」で実体的な説得力をもち、認識者の理解を高い割合で占有し、同時に、自身の単純化された認識過程を相対化する批判意識(self-reflexivity)が失われ、単純化された現象理解に埋没する。結果、異なる別のコンテキストの適用によって立ち現れる新しい理解への思考経路が閉ざされる。

グローバル化する社会では、異質な他者を目にする機会が増え、その都度、上述のような認知プロセスを介して、限定的なコンテキストに依拠した無意識的な理解の発動パターンがより多く経験される可能性がある。そこで、本論考では、多様なコンテキスト間を意図的に移動することによって、単純化のプロセスを解きほぐし、現象の多面的理解の一助となる「コンテキスト間の移動」(context shifting, 以下、CSと表記)(石黒, 2013; Ishiguro, 2015)について詳説する。

本論では、まず、関心相関性(西條, 2005)や「論理科学モード/物語モード」(ブルーナー, 1998, 1999)を用い、本稿における「現象」の意味について論じる。次に、多文化関係学会(2004)によって示された4つの視点ならびにトランスカルチュラルリティ(文化横断性)概念

(Welsh, 1999) を基に、現象の多面的理解のあり方について考察する。そのうえで、多面的理解を支援する「コンテキスト間の移動」(CS) について詳説する。その際、CS を具体的な事例に適用しつつ、どのような形で多面的な現象理解が達成されるのかを例証する。その後、グローバル市民性の観点から CS について論じ、CS がグローバル市民性の獲得において一定の役割を果たす可能性について述べたい。

2. 現象の多面的理解

2.1. 現象理解の関心相関性と動態性

前置きとして、本論考における「現象」についてその意味を示したい。本論でいうところの「現象」は、まず、客観的かつ外在的に存在する事物を仮定し、それに科学的な方法でアクセスし捉えられる対象を意味する。さらに、より広い観点から、人びとが、日常生活のなかで、社会・文化的、生物学的側面によって条件づけられつつ、関心相関的観点から認識するすべての「現象」を指す。「関心相関的観点」とは、すべての価値は欲望や関心、目的と相関的に規定される(西條, 2005) という見方である。たとえば、「水」という事物は、我々の知覚・認知過程のなかで「現象」として立ち現れるわけだが、我々が砂漠にいるときの「水」と水の豊富な地域にいるときの「水」とでは、その相対的な希少性が異なることから、意味に違い出てくる。同様に、「高い経済効率」に強い関心をもつ人の観点から認識される「人」、「物」、「世界」の像(現象)は、「経済効率よりも人間関係を重視すること」に関心をもつ人が認識するそれとは異なる。したがって、一見、同一と考えられる「現象」も、実はさまざまな視点、関心から人びとによって、その像が構成され、眼前に「現象」として立ち現れるものである、と仮定できる。

J・ブルーナー(1998/1999)の二元論的枠組みで上記2つの現象理解のあり方を整理すると、まず、冒頭で示した科学による現象の客観

的把握は「論理科学モード」であり、一方、関心相関的な観点から人びとが現実(現象)を構成するというのは「物語モード」にあたる。前者は、因果関係や事実検証を重視する自然科学的な理解の様式で、普遍的な真理、真実を捉えようとする志向性があり、後者は、さまざまな社会・文化に応じて現象を理解するための多様な形式(世界を説明する物語)があるとする。後者は、現・近代社会において「非科学的」なものとして異端な扱いをうけるようなローカル知(たとえば、ある村の稲荷信仰に基づく神秘体験等の現象の理解)も人びとが生活のなかで「現象」を捉える一つの重要な理解の様式として扱う。

人びとの生活世界に焦点を当てたエスノメソドロロジーの観点からいえば、人びとが日常生活で現象を秩序立てて理解し、ある行為を実践する方法(エスノメソッド)を捉え、尊重する立場である。「自己」、「他者」、「世界」といった人びとが捉える現象を多面的に理解するためには、多様化した社会で機能している論理科学モードと物語モードの双方を射程に収める必要がある。

関心相関的な視点からすれば、実は、先述した「科学的」な「論理科学モード」の知見自体も、「背後に措定されている認識論は研究者の関心や研究目的などと相互的に選択される」(西條, 2005, p. 196) ため、研究者が関心相関的に認識の枠組みを選択している。つまり、「論理科学モード」も、ある視点、認識に立って現象に関心相関的に理解するという意味では、「物語モード」の一つといえ、原理的には変わらない。したがって、本論考では、2つのモードを包摂する広い意味での現象理解を前提に議論を進めたい。

2つのモードを含む「現象」という概念に立脚し、「現象の多面的理解」という場合、それが何を意味するのか、たとえば、目の前に立ち現れている「リンゴ」の像を多面的に理解するというケースを取り上げて論じてみよう。まず

は、リンゴを手にとって、その色、形、大きさ、重さといった諸側面からリンゴを測定し、理解する「論理科学モード」的な営みがある。さらに、リンゴの社会・文化的意味、個人的な経験や好み（好き嫌い）によって、ある関心・目的から「リンゴ」に付与される「物語モード」的な意味を捉えることができる。

以上の2つのモードを介した、自己が理解する意味（意味1）と他者が理解する意味（意味2）があり、また、意味1と2の間にある関係性（類似性、差異）の意味（意味3）も人びとの認識に立ち上がる重要な意味である。これら3つは「リンゴ」を理解するうえで介在しうる意味である。

加えて、上述した意味（意味1,2,3）はコミュニケーションを介して人びとの間で社会的に交渉され、変容される動態性を含んでいる。コミュニケーションにおいて、眼前にあるリンゴが「青森産である」という新情報が追加されると、リンゴの色や形に変化はないが、日本における果物の産地と品質に関する共有知識（コンテキスト）と目の前のリンゴとが瞬時に接合され、眼前のリンゴの意味づけが「ただのリンゴ」から「品質が良く」「おいしい」リンゴといった意味に変化しうる。以上のように、現象の多面的理解は、コミュニケーションを介した社会的な関わりの中かで生成される動的な側面をもつ。

2.2. 多文化関係理解のための4つの視点

ここで、多文化関係学会（Japan Society for Multicultural Relation, JSMR）という学会が提示している4つの視点から、人びとが日常的に実践できる「現象の多面的理解」のあり方についてさらに考察したい。多文化関係学会（2004）は、その学会誌『多文化関係学』第1巻の「投稿規程」（p. 31）において、(1)「文化性の視点」（文化の対比・比較にとどまらず、多様な文化の相互作用に研究対象を広げたもの。この場合の「文化」とは国家を単位としたものに限らない）、(2)「関係性の視点」（当該文化の属性や特徴を明らかにするにとどまらず、文化間のダイナミック

な関係性に焦点をあてたもの）、(3)「超領域性の視点」（当該領域のみの適用にとどまらず、広く諸領域にわたる視点とその応用により、多文化関係学の構築と発展を示唆する研究成果が提示されるもの）、そして(4)「パラダイムシフトへの配慮」（上記の3視点に加え、パラダイムシフトが学術研究全般に与える影響に留意しつつ研究成果が論じられているもの）という、学会に投稿される論文が満たすべき4つの要件を示している。

まず、(1)「文化性の視点」は、国単位で切り分けられた文化（国民文化）だけでなく、民族、地域、性別、職種、教育レベル、健康状態などから条件づけられる多様なレベルの文化を前提とする。多様なレベルの文化は、価値観、思考様式等の内面的な認知活動に関わる精神文化、言語・非言語のコミュニケーション様式に関わる行動文化、ならびに衣食住に代表される物質文化という三層構造（石井, 2013, p. 165）をもつ。「文化性の視点」を第1の項目に設定し、すべての事象は三層構造をもつ文化がなんらかの形で不可避的に関わる性質をもつという視点から、現象を捉える必要性を示唆している。

また、「多様な文化の相互作用に研究対象を広げたもの」とある。グローバル化が進展する社会では、異なる文化の担い手である人びと同士が実際に出会う機会が増加しており、相互作用の中かで何が起きているのかという観点から現象を捉える必要がある。したがって、複数の文化を対比・比較する営みに加え、文化間の相互作用に着目し、現象を多面的に理解することを重視する。

さらに、文化間の相互作用によって形成される関係性に着目したのが、次の(2)「関係性の視点」である。関係性に焦点を当て、グローバル社会で交錯する文化の担い手がコミュニケーションを介して相互に影響しつつ生成する関係性の意味を理解することを示している。これは、2.1. のリンゴの例で示した、自己のコンテキストで生成される意味1と他者のコンテキスト

で生成される意味2が相互に作用するなかで生成される意味3を捉えることに該当する。

(3)「超領域性の視点」から、多面的理解について考えると、本論考における「コンテキスト間の移動」(CS)の文脈でいえば「領域」は「コンテキスト」にあたり、現象理解に適用する「コンテキスト」を少数に限らず、論理科学モードや物語モード双方を含む多様なコンテキストへ視点を意図的に移動させることで、現象の多面的理解を達成するのである。

最後に「パラダイムシフトへの配慮」という観点から現象の多面的理解について考えたい。「コンテキスト」はあるパラダイム(その領域、分野における思考の枠組み)から引き出されるものであるため、パラダイム自体を変えることが現象の理解をダイナミックに変化させるために必要となる。「学術研究全般に与える影響に留意」とあるが、論理科学モード重視の世界観から物語モード重視のそれへシフトする例を想起すると、現象の多面的理解におけるパラダイムシフトは、人びとによる現象の捉え方が大きく変わることを意味し、結果、「生活全般」に影響を与える。

以上4つの視点では、多面的な現象理解において、人びとの生活全般に不可避免的に影響を与える文化を重視し、文化の捉え方を、国民文化に限らず地域や性別等による諸文化も視野に入れたより細かなものに切り替え、多様な文化間で生起する相互作用とそれによって生まれる関係性を捉える動的な視点が示されていた。次節では、文化をさらに柔軟に捉え、社会や個人が複数の文化が合わさった構成物であることを示す議論を紹介し、現代社会で求められる現象の多面的理解についてさらに考察を展開したい。

2.3. トランスカルチュラルリティ

グローバル化する現代社会は、1つの国の内部でも文化的に多様化しており、もはや一様なものではない。そのため、均質的で一様な文化観のみでは現実にある社会の複雑性を説明でき

ない。この状況に対応する知見として、Welsch (1999)が構想する「トランスカルチュラルリティ」(transculturality, 文化横断性)概念がある。それは、文化が相互に浸透し合い、混ざり合うものであり、お互いに結びついてネットワークを形成している、という見方を示すものである。

多様化した社会の実態があるにもかかわらず、日常生活を日本で暮らす多くの人びとがもつ認識世界で機能する文化観は、混交的で動的な文化ではなく、画一的で静的な文化概念であることの方が多いのではないだろうか。もちろん、この古典的文化観には、人びとや社会をひとまとめに説明するうえで一定の有用性を見出せるとしても、異質な他者に対する排他的な見方を助長することもあり、多面的な現象理解を醸成するうえで、有用性を上回る弊害がある。

Welsch (1999)によれば、多文化主義といった文化に関わる多くの用語は、相互理解、相互尊重を促す規範的側面をもつ一方で、「古典的文化概念」を前提とすることが多いため、相互理解・尊重をスローガンとして掲げながらも、他者と自己の境界化を促す原理が隠されており、実は多様な文化の影響をうけた社会や個人の諸側面を見えなくしてしまう。つまり、自己と他者との境界を明確化し、社会や個人の内部を一様化する「閉鎖系」の文化概念である。

トランスカルチュラルリティは、より「開放系」の文化概念であり、文化的な混交体として社会や個人を微細かつ動的に捉えようとする志向性は、古典的な文化観の境界化作用を超えて、現象の多面的理解を促すものであり、グローバル社会で要請される微細な現象理解に対応するものである。次に、その要請に応える形で、多面的理解を支援するCSについて説明する。

3. コンテキスト間の移動

3.1. 定義

コンテキスト間の移動(context shifting, CS)とは、その実践者が、自己、他者、自他の関係

性を含む眼前に立ち現れる現象を単純化し否定的に捉えている状態から抜け出し、新しい視点や理解を得るために、複数の異なる認知的枠組み（具体的にはコンテキスト）へ移動することである。異文化コミュニケーション能力（inter-cultural communication competence, ICC）研究においてCSを位置付けると次のようになる。まず、ICC研究ではこれまで数多くのコンペタンス・モデルが提示されてきたが、共通する特徴は、認知、情動、行動という3つの側面を対象として扱う（Spitzberg & Changnon, 2009）ことである。たとえば、文化が自分の思考、行動に影響を与えていることを認知している文化的自覚（cultural self-awareness）（Deardorff, 2006）、複数の文化的視点や異なる文化的解釈に関する知識（Gudykunst, 1993）、新しいカテゴリーを作り出す知的能力（ibid.）といった内容が含まれる。CSはこうした認知的能力に焦点を当てたものである。

Bennet & Bennet (2004)も指摘するように、認知面は情動面および行動面につながっており、3者のトータルな変化が異文化コミュニケーションの成長であるといえる。したがって、CSの主要な対象部分は認知の領域であるが、Chen & Starosta (1998-9)が、“psychic shifts”（以下PSと表記）、すなわち、他者のコンテキストに移動することによって他者のマインドのなかにあるものを推察し、他者の感じていることを自己のなかでも他者のそれに類似した形で再現する能力であるエンパシーを喚起する柔軟な能力を説明する概念で言及しているように、CSにおいてもPSと同様に認知と情動はつながっているという前提にたつ。したがって、ICCの枠組みでいえば、CSは認知と情動に当てはまり、特に認知に焦点を当てた営みである。

このように議論を進めてくると、PSとCSは同一の概念であると理解される。両者の違いは、対象とするコンテキストの種類にある。まず、PSは自己と他者のコンテキスト、特に文

化的コンテキストに焦点を当て、両者のコンテキストの間を移動して自己と他者の間にある類似性や差異へ理解を深めようとするねらいがある。ICCのパラダイム内で創案された概念であるため、文化のコンテキストに焦点化しているのは当然のことであろう。一方、CSが扱うコンテキストの射程は文化的コンテキストに限定されるものではない。たとえば、「グローバル市民性」、「環境問題」等の、人びとによって用いられる概念（共有知識）もコンテキストとして扱い、そのコンテキストへ移動し、そこから現象の意味を理解する営みを含んでいる。

3.2. CSの図式的説明（フレームワーク）

では、CSを図式的に提示する。次頁図1のように、CSを利用する者を取り囲む3つの潜在的なコンテキストがある。図の中央最下部から上に順を追ってマイクロ・コンテキスト、メゾ・コンテキスト、マクロ・コンテキストが配置されている。マクロ・コンテキストはマクロ・コンテキスト1とマクロ・コンテキスト2という2つの次元に区分けされる。

まず、マクロ・コンテキスト1には、特定の集団に属する人びとを指し示す「カテゴリー指標」があり、それは「属性による配置」と「地理的配置」に分類される。「属性による配置」は、国籍、人種、ジェンダー、社会階層といった指標を含み、多くの人々が他者、自己、諸現象を理解する際に頻繁に用いるコンテキストである。たとえば、国籍というコンテキストに依拠し、「あの人はアメリカ人で私は日本人だ」とする理解である。

「地理的配置」は、地球、大陸、国、市、町といった地理的な区分けを指標し、その区分けをコンテキストとして現象を理解するためのものである。たとえば、水資源の問題を「地球」規模の視点で捉えるのと、水が豊富な「町」というコンテキストで捉えるのでは大きな違いがある。比較的水資源に恵まれた地域では見えてこない現実（e.g., 砂漠化）が「地球」という認

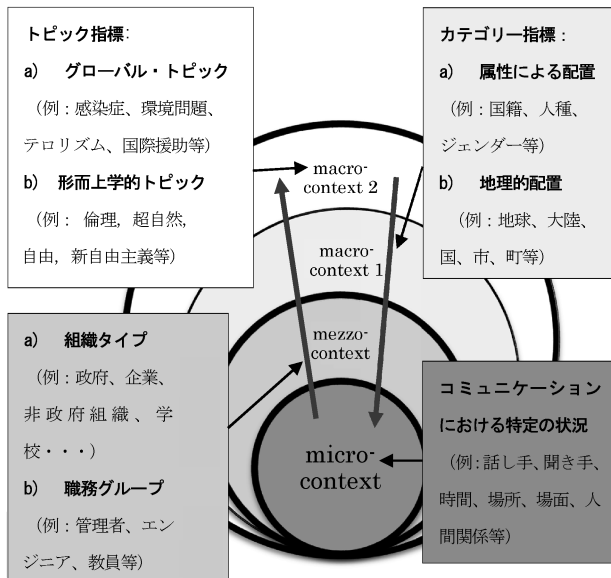


図 1. CS のフレームワーク

知枠組み (コンテキスト) へ視点を移動させることで見えてくる。

CS のフレームワークを構成する諸項目は利用者が新たに設定することができる。たとえば、「地理的配置」の項目として、「南アメリカ」や「東アジア」といった項目を新設できる。冒頭で示した東京・秋葉原における外国人観光客の事例では、経済や文化・道徳といったコンテキストと同時に、「属性による配置」における「国籍」というコンテキストで自他を理解し、他者の行為について否定的なイメージをもつに至るケースであった。そこで、「東アジア」というコンテキストを新設し、そこから自他を捉え直すと、国境を越えた同一の地域に居住し、環境問題、自然災害、感染症、地域の政治的安定、経済などの分野で協力をすべき間柄であることが認識されれば、否定的なイメージだけに偏重しないという点でバランスのとれた、現象 (他者) の多面的な理解が可能となる。

この環境問題、自然災害、感染症等の国を越えたグローバルな影響へ注意を向け、国、地域を越えて協力が必要なコンテキストに移動するための指標がマクロ・コンテキスト 2 に含まれる「グローバル・トピック」である。したがっ

て、上記で示した外国人観光客の事例に CS を適用した前述の説明では、すでにマクロ・コンテキスト 2 の「グローバル・トピック」を発動させている。

同じくマクロ・コンテキスト 2 にある「形而上学的トピック」は、倫理、超自然、自由、新自由主義といった概念をコンテキストとして扱っている。Chen & Starosta (1998-9) の PS のように、自分と相手の文化的コンテキストという文化に焦点を当てた ICC 研究のモデルがもつ認識的枠組みに加え、CS では、記号論の知見を援用して、「形而上学的トピック」で示されるような概念もコンテキストを指標するものとする。マクロ・コンテキストについて小山・綾部 (2009) は次のように説明する。

マクロ・コンテキストとは、社会・歴史的コンテキストの総体を (潜在的には) 含むものであり、したがって、コスモロジー (宇宙観、世界観)、イデオロギー (思想)、概念、そして言語構造 (文法コード) などの (記号論で言う) 「象徴」 (中略)、加えて、いわゆる「自然環境」も含み込んでいる。
(p. 32)

以上の記述からわかるように、「形而上学的トピック」に例示された「新自由主義」といったイデオロギーも当然マクロ・コンテキストに含まれ、組織や個人の現象理解に介在しているのである。

次にメゾ・コンテキストに移ろう。メゾ・コンテキスト (mezzo-context) は、通常、中間の、もしくは組織のコンテキストを指し、「組織タイプ」に関わるコンテキストと「職務グループ」に関わるコンテキストを指す。前者は、政府、企業、NPO・NGO、学校、学部といった組織のタイプに基づくコンテキストを示し、後者は、マネージャー、エンジニア、教員、作業療法士といった職種、職務に関わるグループに基づくコンテキストである。所属組織が異なっても、

職種が同一である場合、「組織タイプ」から「職務グループ」へ視点を移動して、組織タイプから引き出される自他の間にある差異に加え、「職務グループ」における共通点を見だし、理解の多面性につなげるのである。

最後に、マイクロ・コンテキストは、CS実践者の直近のコンテキストを指す。人びとが現象を理解する際には、自分の周囲にいる他者の存在、他者と自己の関係、場所、場面、そこでの役割などのコンテキストが影響を与える。本論考の読者は、この論考をどこで、いかなる役割で読むかといったマイクロ・コンテキストの影響を受けながら、論考の内容という「現象」の意味を理解する。

以上のように、マクロ、メゾ、マイクロというコンテキストを意図的に移動することによって、自然に前景化されてしまった特定のコンテキストに依拠した現象理解からいったん離れ、現象をさまざまなコンテキストから理解するのである。CSの特徴は意図性 (intentionality) であり、無意識に自己の認識を条件づけるコンテキストを相対化するため、いったん他のコンテキストへ意図的に移動し、現象の多面的理解を実現する。

CSにおいては、多様なコンテキストを指し示す言語・非言語記号 (コンテキスト化の合図, Gumperz, 1982) をマイクロなコンテキストにもち込んで、多様なコンテキストに移動しながら、現象の理解を動的に生成していく。

3.3. CSの限界と成功の基準

ただし、この動態性がCSの有効性に関して次のような疑問を呈することになる。CSの有効性について考える材料として、たとえば、「テロリズム」という言語記号 (概念) を一つの概念的コンテキストとしてもち込めば、テロを実行する人びと、すなわち、多面的理解を拒み、一元的に自他を理解し異質な他者を攻撃する人びとの認知活動をCSがはたして変えることができるのか、という深刻な疑問が出てくる。つ

まり、CSの有効性はCSを用いる者がもつ認識の一元化・硬直化の度合いとの関係性で変化することがわかる。

では、CSの成功をどのように測定できるのかといえば、CSの実践により、一時的に前景化された理解を相対化でき、新しい理解を得た時点で、CSは一応成功したといえるだろう。CSの図式的フレームワーク (図1) によって想像力が喚起され、さまざまなコンテキストを想起し、そのコンテキストについて調べたり、そのコンテキストにいる人から話を聞いたりする視点も生まれてくる。したがって、自分が何を知らないか、見ていないかという「無知の知」のような理解を得られ、それが、まだ見えていないものを見ようとするという多面的現象理解への好奇心を育む。

Ishiguro (2015) では、メディアで報道された日中間の歴史・政治の問題 (マクロ・コンテキスト) の影響で、友人関係を解消した、カナダへ留学中の中国人と日本人の留学生の事例 (実話) が紹介されている。そこでは、この二人がCSによって喚起される多面的な理解をベースに相互の関係を見直していれば、友人関係が壊れるという帰結ではなく、場合によっては友人関係が維持されるだけでなく、さらに深まり、歴史や政治についても自由に意見を交換できる関係へ発展した可能性もあったと述べられている。

この事例分析からCSの本質的成功について敷衍して考えれば、それは、CSの使用者が、CSの実践以前に持っていた、より限定的な理解を相対化し、現象の多面的理解を達成したうえで、他者の異質性を尊重したり、自他の価値観に矛盾しない形で他者と共有可能な新たなアイデアや関係の在り方を創発したりすることによって、他者との協力関係を築くための理路を発見することであるといえるだろう。上記の事例分析では、メディアによって枠づけされた歴史・政治というマクロ・コンテキストを、友人関係を破綻させる文脈として用いず、友人関係

をさらに深化させるための契機として読み替える可能性が示された。その前提として、コンテキスト間を移動し、当事者間に共通する関係性を見出すことを中心とする、より多面的・複層的な関係性への理解があった。現象を多面的に理解したうえで、多様な観点から、協働、共生のための新たな結節点、基準、理路を他者とコミュニケーションをとりながら、共同生成する主体性がそこでは求められている。

3.4. コンテキストの所在

上述のような自他をつなげる結節点、理路を共同生成するために、「コンテキスト間の移動」を行うわけだが、この「コンテキスト間の移動」という表現は、あたかもコンテキストが、静態的な形でどこかにあって固定化されており、そこへ人びとが移動するような理解を誘発してしまう。しかしながら、本稿でいう「コンテキスト」は、CSの実践者が置かれた状況に潜在的に無数にあり、意識的もしくは無意識的に人びとが前景化させるもので、その理解も実践者が他者や環境との相互作用のなかでその都度生成していくような動的、過程的なものである。

CSの図式的フレームワークでは、現象理解に介在しうる潜在的な多様なコンテキストを意図的に捉えるためのトリガーとして、マクロ、メゾ、ミクロなコンテキストを図式として固定的に示している。van Dijk (2009) は、コンテキストを社会的状況に関する主観的なメンタルモデル (subjective mental models of social situations) と位置づけ、そのメンタルモデルが社会構造 (人種、民族、ジェンダー、年齢、社会的地位等) と我々の日々のコミュニケーション・パターンをつなぐものであると主張する。したがって、メンタルモデルとして人びとによって理解されるコンテキストは、社会的な構造の影響を受けたものであるが、同時に個人が主観的に解釈する対象である。たとえば、日本人同士で類似したコンテキスト (社会構造や価値観) を共有しているからといって、互いに「和を尊

重し、同調性がある」といった憶測はできず、個々人が、そのような価値観をどのように捉えているかはそれぞれの主観的な理解による。そのため、コンテキストは、どこかに固定的にあって、静態的なものであるという理解ではなく、いま・ここの状況、出来事のなかで人びとの認識のなかで関心相関的かつ動的に生成される社会・文化的かつ個別的な側面が織りなすメンタル・モデルである、ということができる。

CSにおいては、以上のような動的な解釈を生み出すトリガーとしてのコンテキストを図式化して示す。その図式を利用するCS実践者は、図式化された多様なコンテキストを移動しながら、コンテキストを間主観的に解釈し、自身のバージョンを認識のなかで生成する。換言すれば、CSの図式で示されているトリガーとしてのコンテキストは、一定の共通性を持つが、誰にとっても常に同じ意味をもたらすものではない。このことから、CSの実践においては、図式的に示されたコンテキストから自身が引き出す意味が、他者が見い出すであろう意味と違う可能性を考慮する慎重さが不可欠である。

3.5. グローバル市民とCS

では、以上のような動的かつ慎重なコンテキストの理解を確認したうえで、グローバル市民性との関係に焦点を当て、CSの特徴についてさらに考察したい。CSにおいては、「グローバル・トピック」に象徴されるように、グローバルな視点から現象を捉える認知プロセスを前景化する。そのため、グローバル市民性 (global citizenship) と高い親和性をもつ。ここで、グローバル市民 (性) に関する2つの言説を示し、CSとの関連性について論じ、CSがグローバル市民性につながる国際的な教養を醸成するうえで果たす役割について考察したい。

まず、小池 (2013) は、グローバル (市民) 教育を定義するなかで、「自分がよければ、自分の町がよければ、自分の国がよければ・・・」などの限定的考え方を払拭し、地球全体の視点

から物事を考えられる人材、「地球市民」の育成をめざす教育である」(p. 261)と述べている。ここでの「限定的な考え方」は、自分と近接性の高い場所とそこで暮らす人びとを優先する考え方であり、CSを構想する背景となった問題、すなわち限定的現象理解に符号する。

さらに、CSのマクロ・コンテキスト1における「地理的配置」とその項目である「地球」というコンテキストは、こうした近接性に基づく、地元志向の限定的な思考や自然的態度を相対化し、他のロケーションとのつながりを考察させるもので、CSの利用者が、「遠い世界」のモノ・人が自身の生活とつながっており、場合によっては日々の生活を支えている、という事実を見出すきっかけを与えることがある。CSの実践によって、「近接性による優先」を、いったんカッコ(「」)に括って、別の視点から現象の意味を再考するのである。

Ashwill & Hoang Oanh (2009) はグローバル市民性について以下のように述べている。

Global citizenship is not just a static mind-set but a dynamic worldview imbued with a sense of commitment to issues of social and economic justice at the local, national, and international levels. (p. 141)

グローバル市民性は、単なる「静態的なマインドセット」ではなく、地域的、国家的、国際的なレベルで生起する社会・経済的な正義の問題に深くかかわっていく感覚にあふれる動的な世界観のことを指す、という。この「地域的、国家的、国際的レベル」という箇所は、さまざまな地理的配置へ視点を移動して事象をグローバルに考察するというCSの認知プロセスと整合性がある。

一方で「社会的・経済的な正義の問題」というのはどうだろうか。CSの目的は第一義的に現象の多面的理解であるが、その背景にある志向性は、CSのユーザーが多面的な理解をもつ

て他者とかかわり、可能であればグローバルなスケールで他者と協力関係を形成しようという意識の醸成である。これはグローバル・トピックというコンテキスト指標が概念図に配置されていることからわかる。また、CSのメカニズムからいえば、「正義」は「形而上学的トピック」の範疇に入るコンテキストである。正義というコンテキストから、社会・経済的な現象を考察することは、現象の多面的理解につながり、上記の「グローバル市民性」が要請する問題意識を育てることができる。

上述してきた論点、つまり、近接性による優先の相対化、グローバル・スケールで考察する能力、社会・経済的問題への積極的関わりというすべてにおいて、CSによる視点の移動と多面的な現象理解が活用できるといえよう。したがって、CSはグローバル市民が有すべき意識、能力、教養を育てるツールであるといえる。

4. 結語

本論考の目的は、現象の多面的な理解について詳説し、そのうえで、多面的な理解を支援するCS概念とその概念図を具体例を交えながら説明し、CSが現象の多面的な理解を通してグローバル市民性の養成に寄与することを論じることであった。

上述してきたように、目的は一定程度果たせたと考えられるが、CS概念は未だ発展途上であり、以下の限界がある。まず、各コンテキストを構成する指標の例示が限られている。また、いまだ限られた事例でCSの機能を検証したところであり、より多くの事例において、その機能を検証し、CSをさらに修正し、発展させる必要がある。また、教育の場でCSを活用し、その使用がもたらす効果についてデータを収集する必要があるだろう。

以上の限界や課題があるものの、「コンテキスト間の移動」(CS)という概念および実践は、「国際教養」と呼ばれる実態が見えにくい概念を構成する具体的な一要素であると考えられ、

グローバル市民性の育成に貢献できる特徴を備えている。今後もグローバル市民性との関係について考察を深めながら、CS を発展させていきたい。

引用文献

- Ashwill, M. A. & Hoang Oanh, D. (2009). Developing globally competent citizens: The contrasting cases of the United States and Vietnam. D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE handbook of intercultural competence* (pp. 141–157). Thousand Oaks, New Delhi, London, Singapore: SAGE Publications.
- Bennet, J. M., & Bennet, M. J. (2004). Developing intercultural sensitivity: An integrative approach to global and domestic diversity. In D. Landis, J. M. Bennet, & M. J. Bennet (Eds.), *Handbook of intercultural training* (3rd. ed., pp. 147–165). Thousand Oaks, London, New Delhi: SAGE Publications.
- ブルーナー, J. (1998). 『可能世界の心理』(田中一彦・訳) みすず書房 (Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.).
- ブルーナー, J. (1999). 『意味の復権: フォークサイコロロジーに向けて』(岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子・訳) ミネルヴァ書房 (Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.).
- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (1998-9). A review of the concept of intercultural awareness. *Human Communication*, 2, 27–54.
- Deardorff, D. K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. *Journal of Studies in Intercultural Education*, 10, 241–266.
- Gudykunst, W. B. (1993). Toward a theory of effective interpersonal and intergroup communication. In R. J. Wiseman & J. Koester (Eds.), *Intercultural communication competence* (International and Intercultural Communication Annual, Vol. 16, pp. 3–71). Newbury Park, CA: Sage.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. New York, NY: Cambridge University Press.
- 石井 敏 (2013). 「文化の構造」石井 敏・久米昭元 (編集代表) 浅井亜紀子・伊藤明美・久保田真弓・清 ルミ・古家 聡 (編) 『異文化コミュニケーション事典』(p. 165) 春風社.
- 石黒武人 (2013). 「異文化コミュニケーションの教育・訓練」石井 敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人 『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』(pp. 207–230) 有斐閣.
- Ishiguro, T. (2015). Intercultural context-shifting: A praxis toward a multiple understanding of interpersonal relationships for constructive intercultural communication. *Selected Research Papers in Applied Linguistics* (『応用言語学研究』) 16, 119–131, Graduate School of Applied Linguistics, Meikai University.
- 石黒武人 (2015). 「異文化間の関係構築におけるトランスカルチュラル・アイデンティティの表出構造: 映画『グラン・トリノ』において観察されるアイデンティティ・ワークの談話分析」『異文化コミュニケーション』18, 15–34 頁.
- 稲葉陽二 (2011). 『ソーシャル・キャピタル入門: 孤立から絆へ』中央公論新社.
- 小池浩子 (2013). 「グローバル教育」石井 敏・久米昭元 (編集代表) 浅井亜紀子・伊藤明美・久保田真弓・清 ルミ・古家 聡 (編) 『異文化コミュニケーション事典』(p. 261) 春風社.
- 小山 亘・綾部保志 (2009). 「社会文化コミュニケーション、文法、英語教育: 現代言語人類学と記号論の射程」綾部保志 (編) 『言語人類学から見た英語教育』(pp. 9–85) ひつ

じ書房.

西條剛央 (2005). 『構造構成主義とは何か：次世代人間科学の原理』 北大路書房.

Spitzberg, B. H., & Changnon, G. (2009). Conceptualizing intercultural competence. In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE handbook of intercultural competence* (pp. 2–52). Thousand Oaks, CA, London, New Delhi, Far East Square: Sage Publications.

多文化関係学会 (編) (2004). 「多文化関係学会誌『多文化関係学』 (Multicultural Relations)

投稿規程」 (2003年3月7日制定) 『多文化関係学』 第1巻, 31–34頁.

van Dijk, T. A. (2009). *Society and discourse: How social contexts influence text and talk*. Cambridge, New York, Melbourne, Madrid, Cape Town, Singapore, Sao Paulo, Delhi, Mexico City: Cambridge.

Welsch, W. (1999). Transculturality – the puzzling form of cultures today. In M. Featherstone & S. Lash (Eds.), *Spaces of culture: City, nation, and world* (pp. 194–213). London: Sage.